

中国のほんの話(53)

倉石武四郎『中国語五十年』 ～ところとこととことばは相構えて離れず～

蔭山 達弥

「日本は古来、中国文化の輸入によって、その文化の基礎が据えられた。漢文訓読は、ほぼ現在のような形ができたのは、早くも奈良時代末期から平安時代にかけてである。訓読は賢明な便法ではあったが、中国文にふくまれる論理の正確な把握がさまたげられた。」(安藤彦太郎『中国語と近代日本』岩波新書1988)

「日本は今から千六、七百年以前に、中国から古典を輸入した。そして、それを日本語に翻訳して、手ばやくこれを吸収しようとした。(中略)しかし、こうして中国の言語は漢字の影にかくれ、言語から離れた文字が日本に横行した。これが漢文教育がついに終焉にのぞんだ根本原因である。こうした状況にとってかわって、生きた中国語をわかり学徒に注入しようとする以上、漢文教育の二の舞は、どんなにしても避けねばならず、しかも、漢字に固定したイメージは、ある点までは中国語と共通するが、ある点では遠くへだたっていて、今日では使いものにならない。これを予防するためには、漢字からいちおう絶縁して、つまりは日本語から絶縁して、中国語を学習させる、これこそ急がばまわれの方法である」(倉石武四郎『中国語五十年』岩波新書1973)

大半の日本人学生は、中国語を学ぶ際、漢字にたよって視覚から中国語を理解しようとする。しかし、それは間違いである。言葉は音声である。文字にとらわれず、音から中国語を理解しなければならない。中国語学習者は、中国人のいわれることばを聴き取ることに全力を投入しなくてはならない。

今から五十年近く前の1963年、当時としては異色の中国語辞典が世に出た。倉石武四郎著『岩波中国語辞典』である。同辞典は「耳で聞いてわかる北京のことば」を収めたもので、ローマ字(アルファベット)順の配列、ピンイン(中国式表音ローマ字)のついた例文、こなれた訳語など、中国語のめばしい辞書が少なかった筆者の学生時代、皆がこの辞書のお世話になった。

中国語を選択する学生、特に第二外国語で選択する学生の大半は、テストに発音表記であるピンインが出題されることを極度に敬遠する。しかしテキストの例文を、視覚的に暗記しても、中国語の簡単な会話さえ覚えられないことは自明の理である。まさに倉石先生が憂えておられた「学



生は漢字にたよってことばをおろそかにしてしまう」弊害である。

中国人の書いた文章は、漢文の訓読のように転倒して読むことはせず、標準語で音読し、中国人の思考のしかたに沿って読むのが正しい方法である。中国の古典を、訓読ではなくて音読(ピンインによる発音表記)で表された『中国古典講話』(大修館書店1974)の前書きの部分で、著者倉石先生は次のように言っておられる。

「わたくしは本居宣長の『古事記伝』の「ところとこととことばとは相構えて離れず」という語に推服しているものであるが、日本人はこれまで、訓読ですましたのは漢籍のことをてっとりばやく服用することにたくみで、あるいはたくみであろうとして、ことばのことを忘れたものである。」

また『中国語五十年』のあとがきのなかで、再度『古事記伝』の一句に触れられ、「われわれは今日のことばをおさめるとともに、今日のことをまなばなければならない。かくしてはじめて今日ないし今日以後、中国のひとびとのことをとらえることができようというものである。中国との友好は、けっして相互の利益によってのみ結ばれるものではない。よくあいてのころをとらえてこそ、たがいに手をにぎることができる。そのころをとらえるための、ひとつの道はことばである。しかし、日本人はこの大切なことばを二千年に近く無視してきた。」とも述べられている。

中国語をこれから学ぼうとする人、すでに学び始めて壁に突き当たっている人、今から半世紀以上も前に日本ではじめて漢字のない画期的な中国語教本を作った倉石先生の言葉に耳を傾けていただきたい。

かげやま たつや(教授・中国文学)